

再発見・牛久第三十話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

熊沢蕃山と牛久①

思想家(陽明学)熊沢蕃山

と牛久藩藩主山口家

―蕃山の生家

野尻家は代々牛久藩重臣―

戦国大名・福島正則

―正則に蕃山の実父が仕えていた―

福島正則は、幼少のころから豊臣秀吉に小姓として仕え、秀吉が出世の大きな道をかけのぼる糸口になった鳥取城攻めや山崎合戦ここで秀吉が明智光秀を打ち破った。現在は京都府乙訓郡大山崎町で戦功をあげ、播磨国神東郡内(現兵庫県)において500石をうけた。正則の場合は、出世の端緒になったのが天正11年(1583年)4月に賤ヶ岳(琵琶湖北岸。現滋賀県長浜市)で豊臣秀吉が柴田勝家を破った合戦の戦功であった。前年の天正10年6月に倒れた織田信長の政権を二分して、豊臣秀吉と柴田勝家が賤ヶ岳一帯で戦い、福島正則(23)・

加藤清政(22)・加藤嘉明(24)・脇坂安治(30)・片桐且元(28)・平野長泰(25)・糟屋武則(不詳)・石川一光(不詳)・討死)・桜井家一(不詳)ら先懸衆の働きによって戦局が秀吉軍勝利へ大きく転換した。秀吉は戦後、彼ら先懸衆に感状を与え、3千石から5千石を行賞した。彼らは世に『賤ヶ岳七本槍』と称揚された。

その後、正則の所領は、20万石になって、秀吉の全国平定戦はもとより、朝鮮へも出兵し、文禄4年(1595年)に尾張・清洲(現愛知県清須市)で24万石に増加された。正則をとりたてた秀吉も、慶長3年(1598年)8月に63歳を一期として没した。

秀吉没後、世人は徳川家康を『天下殿』とうわさしたが、豊臣政権を維持するため、その前に立ちふさがったのが石田三成であった。三成は、秀吉の腹臣で、豊臣政権の五奉行の一人であった。

家康は、豊臣恩顧の大名の三成ら文治官僚派と、福島正則・加藤清正ら歴戦の武闘派との対立に乗じて、さらに天下取りへの基盤を固

めていった。

関ヶ原の前哨戦は、家康の会津征伐をもって開始された。

三成は、五大老の一人である会津の上杉景勝と呼応して家康を東西から狙撃する作戦を立てていた。が、これを察知した家康は逆に陽動作戦をとった。家康は自分が会津征伐を名目にして大坂を離れば、かならず三成が挙兵するであろうとふんで、慶長5年(1600年)の5月に入ると、5万5800余の上杉征伐軍を率いて大坂城を出発し、7月2日に江戸城に着いた。家康が予期していたとおり、三成は同月19日に家康の譜代の功臣鳥井元忠の守る伏見城(現京都府京都市)に攻撃をかけて城中の全員を戦死させた。

小山(現栃木県小山市)での協力で家康は福島正則・細川忠興・加藤嘉明らの諸将に上杉征伐の先陣を命じた。

関ヶ原合戦後、その戦功で、福島正則は安芸(現広島県)・備後(現広島県)で50万石余を与えられた。

家康は、慶長8年(1603年)2月に征夷大将軍に任命され、源・足利両家について武門として3

番目の政権・江戸幕府を開いた。

慶長19年(1614年)に大坂城で、冬の陣、翌元和元年には夏の陣がおこつて、秀頼が自害し、豊臣家は滅亡した。この年、幕府は、一国一城令と武家諸法度を発布した。幕府は元和5年(1619年)6月に正則の居城・広島城修築を武家諸法度違反と断定し、正則の49万8千石余の所領を没収、信濃国川中島(現長野県長野市)4万5千石余に減封し、塾居を命じた。

熊沢蕃山の実父野尻一利と養父熊沢守久は浪人になる

―福島正則減封で―

正則の所領が49万8千石余から4万5千石余に減封となったため、家臣の多くが浪人となった。蕃山の実父野尻藤兵衛一利と養父熊沢半右衛門守久も浪人となった。



熊沢蕃山肖像画一提供は古河市大堤・正源山鮭延寺